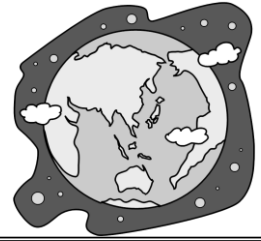


そ 宇宙



力強さの源

済美教育センター 指導主事 吉田 雄一

「大きくなったらお医者さんになりたいです。もっともっと勉強したいと思います。」

令和元年11月23日、帰国児童・生徒及び外国人児童・生徒のスピーチや、アトラクションなどを通して交流を深める「国際交流の集い」が、杉並区立久我山会館において開催されました。冒頭の力強い言葉は、代表児童の一人が語ったスピーチの内容の一部です。この児童は日本に来た当初、日本語は分からなかったそうです。それから僅か数ヶ月、代表として堂々と舞台上でスピーチをし、今で

は平仮名も片仮名も書けるようになり、漢字も少し書けるようになったと発表していました。ここまで日本語を習得するには相当な苦勞があったことでしょう。ここに至るまでの苦勞を乗り越えるためには、明確な目標をもち、多くの努力を日々積み重ねる必要があったことは言うまでもありません。そういったことを想像しながらスピーチを聞くと、この児童の言葉をはじめとして、発表した15名の児童・生徒の言葉の一語一語が胸に響きました。

帰国児童・生徒及び外国人児童・生徒によるスピーチは、児童・生徒が感じていることや日本で頑張っていることなどを、15名全員が日本語を用いて伝えました。生まれ育った国、文化や生活による違いを乗り越え、自分の思いを自分の言葉で伝えることで、聞き手である私たちの心を揺さぶるような力強いスピーチとなりました。15名全員が堂々と発表しましたが、本人の努力はもちろんのこと、保護者や日本語指導をくださった先生方、支えてくれた友達の影響も大きかったことでしょう。そのような様々な人たちの思いを受けたスピーチだからこそ、聞き手に強い感銘を与えたのだと思います。このような機会を通して、我々は異国の文化や生活、言葉に対して興味・関心をもち、日本での生活を通して成長する児童・生徒の様子的一端を垣間見ることができます。また、保護者や参観者は、未来を担う児童・生徒に対し、国際社会を生きる一人として、力強く成長してほしいという思いを抱くのではないかと思います。

アトラクションでは、「和太鼓教室 龍」の皆様による和太鼓の演奏が披露されました。和太鼓の迫力や響き、息の合った演奏に加え、演奏者の真剣な眼差しに、観客も自然と引き込まれる魅力がありました。和太鼓の体験コーナーでは、演奏者の指導を受けながら、児童・生徒は聴くだけでなく、和太鼓の響きを体や心で感じることができ、楽しそうに演奏している姿が印象的でした。アトラクションで実際に体験することを通して、日本の伝統文化に対する理解を深めることができました。

「国際交流の集い」を通して、多くの方からの支援を受けながら日本で成長していく帰国児童・生徒及び外国人児童・生徒を間近で見、学びの様子を知ることができました。そして一人一人が自らの思いを力強い言葉で伝える姿に、日本語指導の必要性を確信しました。

結びになりましたが、開催に当たり、各校の校長・副校長、担任の先生方には格別の御配慮と御支援を賜りました。ここに御礼申し上げますとともに、今後も済美教育センターは学校の取組を支援してまいります。

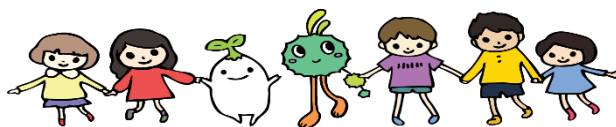


安心とともに

杉並区立松ノ木中学校 主任教諭 濱野 成都

Aさんは、8月下旬にタイから編入してきました。それまで、学校ではすべて英語を使って過ごしていましたが、家庭では日本語を使っていたので、日常会話は日本語でできました。また、小学校のときに松ノ木小学校に一時、在籍していたので、中学校に友達もいました。初めて登校した日に、同じクラスにいた友達が「Aさん！同じクラスなんだねー。」と言って、すぐ話しかけていました。他の生徒は、最初はどう話しかけていいかわからない様子でしたが、次第に声をかけ、クラスになじんでいきました。

転入から2週間ほどで、日本語指導が始まりました。担当の日本語指導の先生が毎回丁寧に本人と面談し、Aさんに合わせた学習が進んでいきました。そうした丁寧な聞き取りの中から、Aさんは日本語を話すことは問題ないものの、漢字の読み書きに困っていることがわかりました。常にAさんに寄り添った指導をしてくださる日本語指導の先生がそばにいてくれることで、Aさんの生活はさらに安定していきました。学習指導だけではなく、日々の困り感や体調面など、本人に合った指導をしてくださり、とても安心でき、本当に感謝しています。11月に行われた「国際交流の集い」の日本語スピーチは、参加はしませんでした。これからは焦らず自分のペースで生活しながら、色々な壁をひとつひとつ乗り越えていってくれたら、と願っています。



日本語指導と二人三脚

杉並区立永福小学校 教諭 小林 公輔

Bさんは、小学2年生の4月から本校に通い始めました。何度か来日した程度だったので、日本語を聞き取ったり、話したりすることがほとんどできませんでした。初めて会った日は、緊張した姿に不安いっぱいの表情だったことを覚えています。初めての日本での学校生活は分からないことだらけの日々で、たくさんの困り感を抱えながらの生活だったと思います。それでも、日本の学校に慣れようとひた向きに努力する姿が印象的でした。

私自身もこれからの授業やコミュニケーションはどうしたらいいのか、不安でいっぱいでした。日本語では伝わらないことが多くあったので、簡単な英語や翻訳ツールを使って、コミュニケーションを図る日々が続きました。日本語の意味を英語で伝え、少しずつ日本語に慣れてもらおうと指導し、日本語の挨拶やひらがな50音の練習からスタートしました。

ひらがなで名前を書けるようになった頃から、みんなと同じことができないことへの歯がゆさを感じているようでした。また、覚えた日本語が増えているのに、それを使うことにためらいも感じていました。伝えられないことやぎこちない日本語を笑われてしまうことに対する恐れからだったと思います。そこで初めて私の指導の失敗に気づきました。私はBさんとのコミュニケーションの時間を取ることに優先したことで、Bさんは他の友達とのコミュニケーションの場が少なくなってしまうのでした。それから少しずつ遠くで見守り、子どもたちの力を信じ、任せることにしました。クラスみんなで支え、教え合っていく中で、Bさん自身がみんなと同じことをする機会が増えました。

このように多くの活動を通して、自分自身で友達と関わっていく中で安心して過ごせる場を自分で見つけてきました。教師の支援は不可欠ですが、子ども同士の関わりこそが子どもの成長を支える土台だと再認識させられました。

5月から日本語指導が始まりました。Bさんにとって貴重な時間でした。自分にあったペースで日本語を学ぶことができ、日本語に確かな自信をつけていきました。日本語指導の時間になると大きな声で「行ってきます。」とクラスの友達に伝え、指導が終わると「ただいま。」と元気よく戻ってきます。2学期になると、漢字テストや詩にも挑戦しました。11月の「国際交流の集い」に向けて、スピーチの練習にも取り組みました。本番前にクラスの友達に発表しました。カナダの学校と日本の学校の違いなどについて堂々と発表する姿は、出会った頃の不安な面影はなく、自信に溢れた姿でした。日本語指導だけでなく、文化の違いによる困り感にも寄り添い、丁寧に心をほどいていってくださったことで、明るく元気よく学校生活を送ってくれているのだと思います。丁寧なご指導、ありがとうございました。私にとっても忘れられない貴重な体験となりました。

日本とネパールの架け橋

杉並区立天沼小学校 主任教諭 山口 悠介

Cさんは5年生の5月にネパールから転校してきました。当時は全く日本語が話せず、読み書きもほとんどできませんでした。体育の授業では耳にピアスを付けていたので「危険だから外した方がいいよ。」と伝えても「No. No.」と言うだけで全くコミュニケーションがとれませんでした。また、暑い国から来たので6月の水泳は1回入っただけで、あとは寒いから入りたくないと頑なに拒んでいました。私もCさんも文化や習慣の違いに戸惑うことばかりでこの先どうになってしまうのかと不安でいっぱいでした。また、高学年という事もあり学習は、全く理解できずにいたのでこのままで良いのか悩みが尽きませんでした。

そんなある日、救世主として現れたのが日本語指導の先生でした。週に3、4回カードやプリントを用いて粘り強く、何度も繰り返し指導していただいたおかげで本当にCさんは成長しました。日本語がまったく分からなかったCさんが、徐々に平仮名、カタカナを覚えていく姿には目を見張るものがありました。

教室でも、日直として大きな声であいさつをしたり、日本語10問テストでは100点を取ったりと日々の生活の中で日本語指導の成果を発揮できるようになってきました。また、行事にも意欲的に参加できるようになり、運動会、音楽会、長縄記録会などの行事にも自信をもって臨めるようになりました。日本の文化や習慣にも慣れようとしていて、気付くと耳に付いていたピアスも外していました。

日本語指導の先生は、日本語指導のみならずネパールの文化や習慣を交換ノートで私に伝えてくださったり、日本の文化や習慣をCさんに伝えてくださったり、私とCさんのパイプ役にもなってくださいました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

今後もCさんが日本語指導を通して学んだことを日々の生活に活かしていけるように声を掛け、自信をもたせていきたいと思えます。本当にありがとうございました。



日本語指導を通して感じた成長

杉並区立杉並第七小学校 教諭 吉田 直樹

5年生の10月から本校に通い始めたDさん。中国から日本に来たのはその少し前からなので、もちろんほとんど日本語は話せませんでした。最初の頃は英語や身振り、手振りを入れながら話をしていました。とても緊張をしているのが伝わり、どのようにコミュニケーションをとろうかと考えながら対応していたことを覚えています。クラスの子どもたちも同じで緊張しながら話しかけていました。

通学を始めて1週間後に日本語指導が始まりました。最初は、日本語指導も緊張していたようでしたが、通い始めているうちに楽しみになったようで、笑顔で行く姿を見るようになりました。日本語指導の先生との話や連絡ノートで授業の様子を伺うと、クラスではまだあまり話していないことや好きなことなど、たくさん話しているのを聞き、本当はもっと話がしたいのだと感じました。

Dさんは、とても努力家で、日本語指導で出た宿題があると必ずやってきていました。それだけでなく、自分でもすすんで日本語の学習をしていました。そのようなこともあり、徐々に日本語が分かるようになってきました。そして、徐々にクラスの子どもたちと話ができるようになり、休み時間に一緒に遊ぶ姿を見かけるようになりました。6年生になるころには、授業のおおよその話を理解できるようになりました。

6年生になってからのDさんの課題は『書く』ことでした。自分で考えたことを伝えたり、話したりすることはできるようになりましたが、まだ書くことは難しく、助詞の使い方や文末の表現などは苦手としていました。そのため、連絡ノートで日本語指導の先生とやり取りをして苦手について対策をしていただくと、文章がだんだんと正しく書けるようになってきました。そんな努力を続けた結果、ある日のテストでは、クラスで唯一満点を取ることができました。Dさんがコツコツ努力を続けたこと、日本語指導で丁寧に見ていただいたおかげだと感じています。

今後もDさんが充実した学校生活を送れるようにサポートしていきたいと思えます。



次世代を担う子どもたちに

済美教育センター国際理解教育担当

今年度も、恒例行事の「国際交流の集い」が、令和元年11月23日に無事終了しました。この行事は、杉並区の小・中学校で学ぶ外国から来ている子どもたちや日本の子どもたちが、お互いに理解を深め親善を図ることを目的として、昭和63年に始まり、以後毎年開催され今年度で32回を数える息の長い行事です。

今回スピーチをした児童・生徒は15名です。参加児童・生徒の出身国あるいは帰国前の滞在国は、ネパール、中国、アメリカ、イギリス、カナダ、タイと文字どおり「国際交流」の集いとなりました。

当日は、来賓を含め120名以上の方々が、会場の杉並区立久我山会館を訪れてくださいました。また、回収したアンケートからは「いろいろな国の子が、初めての日本での生活の不安や心配を乗り越えて今日を迎えたと思い、たいへん感動しました。」「2020年のオリ・パラ以降は、日本在住の外国人も増えるため、多文化共生社会を生きる覚悟が必要なことを肌で感じさせられました。」といった声がありました。今後もこの行事を継続していくことと、さらに多くの方々にこの行事を知っていただき参加していただくことの重要性を感じました。

さて、左の表は法務省から昨年の12月に公開されたものです。杉並区の在留外国人総数は全国の自治体の20位に位置しています。

	市区町村	在留外国人数
1	新宿区	43,784
2	江戸川区	38,045
3	川口市	37,855
4	足立区	33,555
5	江東区	31,212
6	豊島区	30,316
7	板橋区	28,417
8	大阪市生野区	28,192
9	大田区	25,332
10	北区	23,339
11	世田谷区	23,167
12	葛飾区	22,804
13	港区	21,644
14	練馬区	21,297
15	中野区	20,267
16	荒川区	19,635
17	豊田市	18,997
18	船橋市	18,760
19	東大阪市	18,633
★ 20	杉並区	18,609

法務省 2019年6月調査 (2019.12.06公開)
「在留外国人総数上位100自治体」より抜粋

また、左下は昨年7月の東京都総務局統計部発表の「国籍・地域別外国人人口の総数」から杉並区の割合を円グラフにしたものです。杉並区の特徴が見えてきます。

右の表は今年度の訪問・補充指導実績と最近6年間の推移です。子どもたちは様々な国から来日・帰国していることやその人数も増加の傾向を見せていることが分かります。

東京都は多文化共生推進指針の中で『定住する外国人の子供たちが日本語を習得し、十分な教育を受けることで、将来東京の一員として、また出身国と日本との懸け橋として様々な分野で活躍することが大いに期待できる』としています。

現在、済美教育センター国際理解教育担当3名、外部講師15名の総勢18名が小・中学校からの要請を受け、日本語の訪問指導・補充指導にあたっています。

子どもたちが、一日も早く日本語で自分の気持ちや考えを伝えることができるようになり、学校や日本での生活を楽しみ、やがては出身国や滞在国との懸け橋となって活躍してくれることを願いながら、日々日本語適応指導に務めています。

今後とも、各学校・各先生方の御理解と御協力をよろしく
お願い申し上げます。

杉並区国籍・地域別外国人人口の割合

